



西田幾多郎先生（四高時代）

西田幾多郎先生

また当時、四高には、西田幾多郎博士⁽⁷⁾がおられた。いうまでもなく、博士は日本が生んだ独創的な哲学者として著名なお方である。明治二十九年（九六）、当時、二十七歳で無名の一学徒であった博士は、第四高等学校講師となった。翌三十年山口高等学校教授となり、三十二年には再び金沢に帰り、四高教授としてその後十年間、四十二年学習院教授となって上京するまで在職されたのである。着任早々の頃の話であるが、新任の若い教師をいじめてやれと、クラスの方が結束して質問攻めにしたが、一々見事に切りかえされ、一同敬意を払ったという。先生の担当学科は、ドイツ語・倫理・心理などであった。山口・金沢の時代は、博士の思想形成にとつて、もっとも重要な時期であったように、このころ勇猛に打坐参禅し、かつ読書思索に精励された。また、しばしば論文を諸雑誌に寄稿し、学校における講義の草案は、のち「善の研究」として集大成され、明治四十四年に出版された。なお、博士が京都帝国大学に赴任されたのは四十三年のことである。

さて、明治三十二年、博士が四高教授として再び金沢に赴任した年は、上人が同校に入学された年にあたる。文科の生徒であった上人は、博士の警咳^{けいがい}に接

(7)西田博士は「現代における理想主義の哲学」(岩波書店刊「西田幾多郎全集」第十四巻所収)の「第六講ブレンタノ学派」の所に「フツサールの純粹現象学とはかくの如き種々なる立場を尽く除去して純粹経験の直接なる姿を記述せんとするものである。即ち自然科学の見方とか、数学的見方などを尽く排除して先験的に純粹現象を研究せんとする学問である」と記しておられる。

かつて戒浄上人は、この点について弁栄聖者にお尋ねされたことがあった。聖者は「フツサールの目ざしておる種々の立場を尽く排除し、本

質真相を純粹經驗する^⑦には、光明主義の五眼明了の立場で、大宇宙全一で独立自存する真実在の現象と合一する。そして自然界と心靈界の一切の現象を三身四智の自受用の境界において体験しなければならぬ^⑧。意味のことを御教示下さった。

(8) 全集中巻一二九頁参照。

(9) 西田幾多郎全集第十七卷所収。

せられた。上人が博士の講義をいかに受けとり、またどのような影響を受けられたか、ということは、興味ある課題である。⁽⁸⁾なお、東大卒業後の上人と博士の交渉を物語る資料が、博士の日記である「寸心日記」⁽⁹⁾明治四十三年六月十一日の条に、

午後鈴木君方に笹本戒浄氏に逢ひいろいろ催眠術の話をしき

と、みえているのは注意される。博士は、四十三年九月に学習院から京都帝大へ転任(発令は五月)されているから、これは京都赴任の三か月程前のことになる。上人は、三十九年七月、東京帝大卒業後、宗教大学で心理学を講義するかたわら引続き大学院に在籍して、その間、心理学研究の必要上、千里眼・透視の催眠実験を六十回以上行なっておられる。博士に対し実験研究の結果についてお話があったものと思われる。なお、文中「鈴木君」とあるのは、鈴木大拙博士のことである。大拙氏も当時、学習院に教鞭をとっており、周知のように西田博士の学生時代からの親友であった。しかし、上人がどのようないきさつから西田博士と会われたのか、また上人と大拙氏との間には、どの程度の交渉があったのかは明らかでない。